

地球から生まれるカタチ

——長野県須坂で田舎暮らしを体験して——

井上 揺子
(建築デザイン研究室)



1. ふれあい館まゆぐら：明治期建設の3階建ての館を移転・改修した。地元ボランティアがお茶を出してくれる。機織り体験もできる。その他数多くの歴史的建造物が保存されている。



2. 古民家：築100年を越している。かつて茅葺きだった屋根は瓦葺きに改修され、入口付近にはトイレや風呂が増築されていた

きっかけ

教員仲間から「中古の別荘を学生達とセルフビルドで改装して使う事ができるのだけど」という話を聞いた。長いこと使われていない別荘に再び人が集ってほしいと地元の間人が望んでいるようだった。その場にいた何人かが面白そうだと思い、実行に移るときは協力したいと申し出た。次にその話題が出たときは、別荘ではなく滝見堂(滝を見るための小屋)を修復する話に変わった。対象は何にせよセルフビルドを楽しむことができ、尚かつ他人が喜んでくれるのは、ギブ&テイク成立で結構なことだ。少し間をおいて今度は滝見堂ではなく、古民家だという。コミンカ…別荘より、滝見堂よりも魅惑的な響きだった。周辺には田畑が広がり、学生達と一緒に収穫した果物でジャムを作る。古民家の土壁を修復し、炉端の廻りの床を磨きあげる。と勝手な妄想が頭の中を駆け巡った。

現地へ

興味があるならすぐに古民家を見に来ないかということになった。行く手は長野県須坂市。秋も終わりのある日、我々5人は新幹線の座席で期待と不安を胸に、とりとめない夢物語を語り合いながら現地へ赴いた。

同行する仲間の義兄が迎えに来てくれている。その方が古民家の持ち主を紹介してくれることになっていた。しかしその前に須坂市役所で市長が我々を待っていると言う。都会人が田舎の古民家に手をつけることは役所にとっても某かの関心があることのようにであった。はたして、須坂市はかつて繁栄した養蚕時代の歴史的建造物を復元し(写真1)、県内の学校が校外キャンパスとして利用することでこれらの施設を保存活用する事業「蔵の街並みキャンパス」を展開していた。この事業に則り、古民家を拠点とした活動をしてほしい、ということであった。

その後、念願の古民家へ向かった。大きくカーブし

3. 稲刈り：昔ながらの釜で刈るやり方と、農耕機を使用
しての刈り入れとを体験した



た道で車がとまる。見通しが悪く古民家は見えない。物置小屋の間を抜けて坂道を降り始めると、突然、煙出しのある黒い瓦屋根が現れた(写真2)。入口部分は増築した跡が見られたが、全体の凛とした姿に襟を正す。敷地奥にある蔵が美しい。残念なのは緑側にアルミサッシュが嵌められていることだ。中にはいると土間の上に煤で黒々とした天井が古民家らしい。座敷に上がると天井は高く、漆塗りと思われる木戸のふすま、山河が掘られた雪見障子のガラス、すべてがだいぶ痛んではいるが、襖をあけるごとに確かめるようにため息が漏れる。本物の古民家であった。

構想

古民家を拠点にして活動を始めるには、「蔵の街並みキャンパス」に拠ることが、我々の活動を支援する唯一の手立てであるように思えた。市役所の担当者とメールをやりとりし、3ヶ月後もう一度現地で所有者と会って話が決まった。古民家は無償で貸してくれる。どう改造しようと構わない。都会の若者が伝統的な建造物や田舎生活を体験し何かをつかみ取り、現地の人々も喜ぶようなふれあい出来ることを願っているというのだった。

5月に22年度の「蔵の街並みキャンパス」の説明会に代表者として出席した。昨年の各校の活動報告と今年度の予定を交わし、予算の説明もあった。市が本校へ嬉しいほど協力的であることを感じた。他校の前で「須坂市仁礼地区にある古民家の改修や周辺での農業体験を通して都市と田舎の暮らしの間にあるものを捉え、これからあるべき暮らし方を提案する」という活動計画を発表した時点で賽は投げられた。

夏の合宿で古民家の改修に本当に着手できるのか？セルフビルドで古民家を改修している例を探り始めた。学生たちのワークショップで行う古民家改修に関する実例があったが、どれも建築史の専門家や古建築の改修設計を専門とする人物が携わっている。私は設計監理の経験は長いが、施工については素人同然である。建築史家に話しを聞きに行ったら。まず

は実測し建設当時の状況を知り、その後行われた改修をひとつひとつ取り除き元の状態に戻すのが原則だと教えられた。それが正しいとすれば改造してはならないことになる。悩んだ。我々の古民家は歴史家が研究対象とするような価値がある訳ではない。時の流れ、距離の開きを越えて暮らしのあり様を追求するのが目標である。しかし改造するにも改悪になってはならない。非常勤の伊郷先生に1時間ほど古民家改修の実例をレクチャーいただいた。移築することになった古民家に多くの学生を連れて乗り込んだ話があった。そこでもまず実測をしていた。長い間ほったらかされた家を実測するにはまず掃除から始める。積年のゴミを片付けるのは大仕事である。たった3日の合宿でいったい何が出来るのであろう。

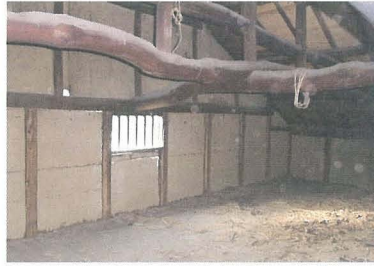
合宿

9月。不安をよそに合宿の日は来た。参加学生は有志20名。バスで須坂に向かい、市長の出迎えを受けた。そこで学生達は初めて自分たちが期待している以上に期待されていることを感じたであろう。予想外なことに信濃毎日新聞、読売新聞(長野版)、テレビ信州の取材があった。次に古民家へ向かう。いよいよ始まる緊張感が高まるが、1日目は時間もなく、まずは周辺環境を知るために峰の原高原の散策をして思い切り自然に触れた。

2日目、近隣の組長さんに挨拶を済まし、朝から作業開始である。農業体験グループは古民家所有者自らの指導の下、稲の刈り入れに挑戦した(写真3)。その間、大工作業体験グループは材木協会から派遣された大工さん指導の下、座敷の畳を上げて板に替える作業(写真4)を行った。助っ人に来てくれた信州大学大学院の男子達が10名ほど、ゆくゆくは寝床にしたいと考えている屋根裏の片付けにとりかかる。皆必至に働き、昼休みとなる。バスで15分ほど離れた公民館で地元のおばさま方が郷土料理のひんのべとおやきを振る舞ってくれた。デザートには新鮮な巨峰が山のように出された。少しうち解



4. 床工事：畳を外すと荒板と呼ばれる下地が現れる。長年の間に乾燥して釘がゆるんでいる箇所をビス留めしているところだ。その後、断熱材としてスタイロフォームを敷き、その上から合板を張った。フローリングで仕上げるのは次回に持ち越しだ



5. 屋根裏部屋：屋根裏部屋の土壁を塗り、床に板を張って寝床にすれば、この古民家で宿泊できるようになる



6. バーベキュー：屋根裏部屋にあったエノキ栽培のプラスチック瓶にキャンドルがはいて、足下灯になった

けた信州大生と文化女子大生は、午後からは協働して片付け作業にあたる者も出てきた。人海戦術とはすごいもので、3日間では何も出来ないと気を揉んでいたが、見る間に屋根裏に山のように積まれたむしろや農具が取り払われ何も無い空間(写真5)となった。座敷の床も下地の合板を余裕で張り終えた。夕方順々に温泉でさっぱりしてから古民家の庭でバーベキューを楽しんだ(写真6)。所有者の篠塚さんは達人な口笛を披露してくれた。最終日は臥竜公園と動物園に行き、カンガルーのハッチ一家に出会う。最後に「蔵の街並み」を散策し、帰途についた。

収穫祭

篠塚さんから、学生が刈り入れた稲から精製された米が贈られてきた。収穫祭をやるようにと手紙がある。我々の試みと学生たちの望みを的確に理解して、近隣の方が都会から来た者たちを受け入れてくれるように心を配る人格者である、その方からの申し入れはさすが、自らが刈った米を食ってこそ田舎の暮らしを理解することに近づくと納得した。12月初めに、調理研究室の協力を得て「篠塚さんの口笛の音色を思いだそう」と銘打った収穫祭を決行した。赤飯をたくように、うるち米と餅米が半々、それに小豆と黒ごまが入っていた。調理研究室の教員の提案で、赤飯の他にグリル(文化祭の出し物のひとつ。建築・インテリア学科が内装の設計施工を担当するレストラン)で好評のちまきをつくらうということになった。前日に下準備をしていただき、当日午後遅めの時間に集まった学生たちが大きな飯台で蒸し上がった飯を具と混ぜ、タケの皮をまいた(写真7)。再度蒸した熱いちまきを皆で頬張り、忙しい都会で須坂を感じた。ちまきはたくさんできたので、他の教員にも分け、次の日須坂へ打合せに行く際のみやげになった。

これから

古民家を借用する一件は、大学と所有者との間で覚書きが締結されたが、その一件が終結するまでには何ヶ月もかかった。初めから計画的に始まったことではないので、先に進む度に検討すべきことが山積みとなった。

12月にはエコ活動をしている地元のグループから、たとえばエコエネルギーを生産する実験のために水車をつくるのが、本校の学生の作品制作と一致するものなら、古民家で協働させてもらいたいとの申し入れがあった。今後の具体的なひらめきが興味深い。

2月には「蔵の街並みキャンパス」での報告会に初めての発表をする。蔵の街並みキャンパスの他の参加校や市役所に真の意味で賛同してもらえるかがかかっている。

3月には春合宿を行う予定である。我々の古民家改修の行方を定める時がそろそろ近づいている。今後少なくとも2年間で、古民家をどのように修復するか、目標を明確にしなければならない。古民家の歴史に敬意を払って実測は行いたい。出来れば2年後もこの活動を続け、須坂で染織や陶器、ファインアートの制作を行い、地元の祭りで披露するなど、学生と地元民のふれあう機会をつくっていききたい。その体験から学生が豊かな暮らし、豊かな文化を培うことを願う。



7. 収穫祭：須坂の餅米から文化女子大生お手製のちまきができあがる